

夏目漱石

文芸と道德



# 文芸と道德



私はこの大阪で講演をやるのは初めてであります。またこういう大勢おおぜいの前に立つのも初めてであります。実は演説をやるつもりではない、むしろ講義をする気であつたのですが、講義というものはこんな多人数を相手にする性質のものでありません。これだけの聴衆全体に通るよ  
うな声を出そうとすれば——第一出る訳がないけれども、万一出るにしても十五分くらいで壇を降りなければ遣り切れないだらうと思ひます。したがって、はじめて

のこともあるしこれほどお集りになった諸君の御厚意に  
対してもなるべく御満足のゆくように、十分面白い講演  
をして帰りたいのはやまくであるけれども、しかしあ  
まりおおぜいお出いでになったから——といって、決して詰つま  
らぬ演説をわざくしようなどという悪意は毛頭ないの  
ですけれども、まあなるべく短かく切上げきりあげることにして、  
そうして——まだ後あとにも面白いのがだいぶありますか  
ら、そのほうで埋め合あわせをして、まず数でコナすような  
ことにしようと思う。実際この暑いのにこうお集まりに  
なって竹の皮へ包んだ寿司すしのように押し合あっていては堪たま

りますすまい。また講演者のほうでも周囲前後左右から出る人の息だけでも——ちよつとこゝへ立ってごらんになればすぐ分わかりますが——實際容易なものではありません。実はこういうように原稿紙へノートが取ってありますから、時々これを見ながら進行すれば順序もよく整い遺漏も少なく、たいへん都合が好よいのですけれども、そんな手温てぬるいことをしてはとても諸君がおとなしく聴きいていてくださるまいと思うから、ところぐ——ではない大部分端折はしよってしまってやるつもりであります。しかしもしおとなしく聴いてくだされば十分にやるかもし

れない。遣ろうと思えば遣れるのです。

問題はあすこに書いてあるとおり「文芸と道徳」というのですが、御承知のとおり私は小説を書いたり批評を書いたりだいたい文学のほうに従事しているために文芸のほうのことをお話する傾きが多うございます。大阪へ来て文芸を談ずるといふことの可否は知りません。儲ける話でもしたらいちばん宣よかろうと思っっているんですが、「文芸と道徳」では題をお聴きになっただけでも儲かりません。その内容をお聴きになっただけではなお儲かりません。けれども別に損をするというほどの縁喜えんぎの悪い題



でもなかろうと思うのです。もちろんお聴になる時間ぐ  
 らいは損になります。そのくらいな損は不運と諦め  
 て辛抱しんぼうして聴いていたゞきたい。

昔の道徳と今の道徳というものの区別、それからお話を  
 をしたと思います。——どうも落付おちついてやっていられ  
 ないような気がして堪らない。そのまえにちよつとこの  
 題の説明をしますが、「道徳と文芸」とある以上、つま  
 り文芸と道徳との関係に帰着するのだから、道徳の關係  
 しない方面、あるいは部分の文芸というものはこゝに論  
 ずるかぎりでない。したがって文芸のうちでも道徳の意

味を帯びた倫理的の臭味くさみを脱却することのできない文芸上の述作についてのお話といっても宣よし、文芸と交渉のある道徳のお話といっても宣いのです。それでまず道徳というものについて昔と今の区別からお話を始めてだんく／＼進行することに致します。

昔の道徳、これはむろん日本でのお話ですから昔の道徳といえは維新前の道徳、すなわち徳川氏時代の道徳を指さすものでありますが、その昔の道徳はどんなものであるかというと、貴方あなたがたも御承知のとおり、一口に申しますと、完全な一種の理想的の型かたちを拵しらえて、その型を

標準としてその型は吾人ごじんが努力の結果実現のできるものとして出立したものであります。だから忠臣でも孝子でももしくは貞女でも、ことごとく完全な模範を前へ置いて、我々ごとき至らぬものも意思のいかん、努力のいかんによつては、この模範どおりのことができるといふたような教え方、徳義の立て方であつたのです。もつとも一概に完全といひましても、意味の取り方で、いろくになりまますけれども、こゝにいうのは仏語ぶつごなどで使う純一無雜まじまず混りけ気のないところと見たら差支さしつかえないでしょう。たとえば鉞あらがねのように種々な異分子を含む

んだ自然物でなくって純金といったように精錬した忠臣なり孝子なりを意味しております。かく完全な模型をひょうぼう標榜して、それに達し得るう念力をもつて修養の功を積むべく余儀なくされたのが昔の徳育であります。もう少し細かく申すはですが、略してまずそのくらいにして次に移ります。

さてこういうふうの倫理観や徳育がどんな影響を個人に与えどんな結果を社会に生ずるかを考えてみますと、まず個人にあつてはすでに模範があができ上りまたその模範が完全という資格を具そなえたものとしてあるのだから、ど

うしてもこの模範どおりにならなければならん、完全の域に進まなければならんという内部の刺激やら外部の鞭べん撻たつがあるから、模倣という意味は離れますまいが、その代り生活全体としては、向上の精神に富んだ気概の強い邁往まいおうの勇を鼓舞されるような一種感激性の活計を営むようになります。また社会一般からいうと、すでにこういうふうな模範的な間然するところなき忠臣孝子貞女を押し立てて、それらの存在を認めるくらいだから、個人に對する一般の倫理上の要求はずいぶん苛酷かこくなものである。また個人の過失に對しては非常に厳格な態度をもつ

ている。少しの過あやまちがあつても許さない、すぐ命に關係してくる。そうでしょう、昔の人はなんぞというと腹を切つて申もうしわけ訳をしたのは諸君も御承知である。今では容易に腹を切りません。これは腹を切らないで済すむからして切らないので、昔だつて切りたい腹ではけつしてなかつたんでしよう。けれども切らせられる。いわゆる詰つめばら腹つめばらで、社会の制裁が非常に悪辣苛酷あくらつなため生きて人に顔が合あわされないからむやみに安く命を棄すてるのでしよう。

今の人から見れば、完全かもしれないが実際あるかな  
いか分らない理想的人物を描いて、それらの偶像に向むかつ

て瞬間の絶間たえまなく努力し感激し、発憤し、また随喜かつごうし渴仰かつごう
 して、そうして社会からは徳義上の弱点に対して微塵の
 容赦もなく嚴重とりあつかに取扱とりあつかわれて、よく人が辛抱しておつ
 たものだという疑うたがも起るが、これにはいろくの原因
 もありましよう。第一には今のように科学的の觀察ゆきが行
 届とどかなかった。つまり人間はどう教育したって不完全な
 ものであるということに気が付かなかつた。不完全な
 は、我々の心掛こころがけが至らぬからの横着おうちやくに起因するのだか
 らして、もう少し修養して黒砂糖を白砂糖に精製するよ
 うな具合に向上しなければならんという考かんがえで一生懸いっしょうけん

命めいに努力したのである。すなわち昔の人には批判的精神が乏しかった。昔から言い伝えている孝子とか貞女とか称するものが、そっくりそのままの姿で再現できるといふ信念が強くて、批判的にこれ等の模範を視みる精神に乏しかったというのがおもなる原因でありましょう。一口にいえば科学というものがあまり開けなかつたからといって宣うございます。のみならずその当時は交通が非常に不便でありまして、東京から大阪へちよつと手紙一本で呼出よびだされてきて講演をするというようなことすら、できなはいとはかぎりませんが、なか／＼億劫おっくうでこう手軽に



はゆきません。来るにしても駕籠かごに揺られて五十三次を  
順々に越すのだから、容易たやすくは間まに合あいかねます。間に  
合わないで済むとすれば、私がどんな人間であるかは、  
諸君に知れずに済んでしまうわけである。知らなければ  
ばよほどえらい人だと思ってくれやしないかと思う。こ  
うやって演壇に立って、フロックコートも着ず、妙な神  
戸辺の商館の手代が着るような背広せびろなどを着てひよこひ  
よこしては安やすっぽくて不可いけない。ウンあんな奴やつかと  
いう気が起るに極きまっている。が駕籠の時代ならそうまで  
器量を下げずに済んだかもしれない。交通の不便な昔は、

山の中に仙人せんじんがいると思っておったくらいだから、江戸には漱石と違って仙人ではないが、まあ仙人に近い人間がいるそうだからの評判で持ち切ってくださいれば私もはなはだ満足のいたりであつたらうが、今日汽車電話の世の中ではすでに仙人そのものが消滅したから、仙人に近い人間の価値ふうさいもしぜん下落して、商館の手代そのままの風采を残念ながら諸君の御覧に入れなければならぬ始末になります。次に、昔は階級制度で社会が括くられていたのだから、階級が違つたと容易に接触すらできなくなる場合も多かつた。今でも天子様などにはむやみには近

づけません。私はまだ拝謁をしませんが、昔は一般から見て今の天皇陛下以上に近づきがたい階級のものがたくさんおったのです。一国の領主に言葉ことばを交まじえるのすら平民にはたいへんな異例でしょう。土下座とかいって地面じべたへ坐すわって、ピタリと頭を下げ、肝腎かんじんの駕籠が通る時にはどんな顔の人がいるのかまるで物色することができなかつた。第一駕籠の中には化物がいるのか人間がいるのかさえ分らなかつたくらいのもものと聞いています。してみると階級が違えば種類が違うという意味になつてその極はどんな人間が世の中にあるかと不思議を挟はさむ余地の

ないくらいに自他の生活に懸隔のある社会制度であつた。したがって突拍子とつぴようしもない偉い人間えらいすなわち模範的な忠臣孝子その他が世の中には現にいるという観念がどこかにあつたに違ちがひない。

以上の諸原因からしてしぜん模範的の道德を一般に強しいて怪しまなかつたのでありましよう。また強いられて黙つていもし、あるいはみずから進んで己おのれに強おのれいもしたのでしよう。ところが維新以後四十四五年を経過した今日になつて、この道德の推移した経路を振返ふりかえつてみると、ちゃんと一定の方向があつて、たゞその方向にのみ

遲疑なく流れてきたようにみえるのは、社会の現象を研究する学者にとってにはなほだ興味のある事柄ことといわなければなりません。しからは維新後の道德が維新前とどういふふうに違つてきたかというのと、かのピタリと理想どおり<sup>か</sup>に定つた完全の道德というものを人に強うる勢力が漸々微弱になるばかりでなく、昔渴仰かつごうした理想そのものがいつのまにか偶像視せられて、その代り事実というものを土台にしてそれから道德を造り上げつゝ今日まで進んできたように思われる。人間は完全なものでない、初めはむろん、いつまで行つても不純であると、事実の觀

察に本もとづいた主義を標榜したといつては間違まちがひになるが、  
 自然なりゆきの成行を逆に点検して四十四年の道德界を貫いてい  
 る潮流を一句につゞめてみるとこの主義にほかならんよ  
 うに思われるから、つまりは吾々が知らずくのあいだ  
 にこの主義を実行して今日に至ったと同じ結果になつた  
 のであります。さて自然の事実をそのままに申せば、た  
 といいかな忠臣でも孝子でも貞女でも、一方からいえば  
 それぐゝ相当の美德を具そなえているのはむろんであるがこ  
 れと同時に一方ではずいぶん如何いかゞわしい欠点を有もつてい  
 る。すなわち忠であり孝であり貞であるとともに、不忠

でもあり不孝でも不貞でもあるということでもあります。こう言葉に現わしていうとなんだか非常に悪くなりますが、いかに至徳の人でもどこかしらに悪いところがあるように、人も解釈し自分でも認めつゝあるのは疑うたがひもない事実だろうと思うのです。現に私がこうやって演壇に立つのは全然諸君のために立つのである、たゞ諸君のために立つのである、と救世軍のようなことをいったって諸君は承知しないでしよう。誰のために立っているかと聞かれたら、社のために立っている、朝日新聞の広告のために立っている、あるいは夏目漱石を天下に紹介する

ために立っていると答えられるでしょう。それで宜よろしい。決して純粹な生き一本いっぽんの動機からここに立って大きな声を出しているのではない。この暑さに襟えりのグタくになるほど汗を垂たらしてまで諸君のために有益な話をしなければ今晚眠られないというほど奇特な心掛こころがけは実のところありません。といったところでこう見えても、まんざら好意も人情もない我儘わがまま一方の男でもない。打ち明けたところを申せば今度の講演を私が断ことわったって免職になるほどの大事件ではないので、東京に寐ねていて、差さ支しがさあいいと健康が許さないとかなんとかかとか言訳いいわけの種を



拵え（しつり）さえすれば、それで済むのです。けれども諸君の  
 ためを思い、また社のためを思い、というと急に偽善め  
 きますが、まあ義理やら好意やらを加味した動機からさ  
 っそく出てきたとすればやはりいくぶんか善人の面影（おもかげ）も  
 ある。有体（ありてい）に白状すれば私は善人でもあり悪人でも――  
 悪人というのは自分ながら少々非道（ひど）いようだが、まず善  
 悪とも多少混（まじ）った人間なる一種の代物（しろもの）で、砂も付き泥（どろ）も  
 つき汚（きた）ないなかに金というものがあるかないかぐらいに  
 含まれているくらいのところだろうと思う。私がこうい  
 うことを平気で諸君の前で述べて、それで貴方（あなた）がたは笑

って聴いているくらいなのだから、今の人は昔に比べる  
とよほど倫理上の意見についても寛大になつてゐること  
が分ります。これが制裁の嚴重で模範的行動を他に強い  
なければ已<sup>や</sup>まない旧幕時代であつたら、こんな露骨を無  
遠慮にいう私はきつと社長に叱<sup>しか</sup>られます。もし社長が大  
名だつたなら叱られるばかりでなく切腹を仰<sup>お</sup>付<sup>お</sup>かるか  
もしれないところですよけれど、明治四十四年の今日は社  
長だつて黙つてゐる。そうして貴方がたは笑つてゐる。  
これほど世の中は穏かになつてきたのです。倫理觀の程  
度が低くなつてきたのです。だんく<sup>やす</sup>住み易い世の中に

なってお互に仕合しあわせでしよう。

かく社会が倫理的動物としての吾人ごじんに対して人間らしい卑近な徳義を要求してそれで我慢がまんするようになって、完全とか至極とかいう理想上の要求を漸次に撤回してしまつた結果はどうなるかという、まず従前から存在していた評価率（道德上の）が自然の間に違ってこなければならぬわけになります。世の中は恐ろしいもので、漸々と道德が崩くずれてくるとそれを評価する眼が違つてきます。昔はお辞儀じぎの仕方が気に入らぬと刀の束つかへ手を懸かけたこともありましたろうが、今ではたとい親密な間柄あいだがら

でも手数のかゝるような挨拶あいさつはやらないようでありま  
す。それで自他ともに不愉快を感じずに済むところが私  
のいわゆる評価率の変化という意味になります。お辞儀  
などはほんの一例ですが、すべて倫理的意義を含む個人  
の行為がいくぶんか従前よりは自由になったため、窮屈  
の度が取れたため、すなわち昔のように強いて行い、む  
りにも為なすという瘖我慢やせがまんも圧迫も微弱になったため、一  
言にしていえば徳義上の評価がいつとなく推移したた  
め、自分の弱点と認めるようなことを恐れもなく人に話  
すのみか、その弱点を行為のうえに露出して我も怪しま

ず、人も咎<sup>とが</sup>めぬという世の中になつたのであります。私  
は明治維新のちようど前の年に生れた人間でありますか  
ら、今日この聴衆諸君のうちにお見えになる若いかたと  
は違つて、どつちかという中途半端<sup>はんぱ</sup>の教育を受けた海  
陸<sup>りようせい</sup>両棲動物のような怪しげなものであります。私等  
のような年輩の過去に比べると、今の若い人はよほど自  
由が利いているようにみえます。また社会がそれだけの  
自由を許しているようにみえます。漢学塾<sup>かんがくじゆく</sup>へ二年でも  
三年でも通<sup>かよ</sup>つた経験のある我々には豪<sup>えら</sup>くもないのに豪そ  
うな顔をしてみたり、性を矯<sup>た</sup>めて瘖我慢をいい張つてみ

たりする癖がよくあつたものです。——今でもだいぶその気味があるかもしれませんが。——ところが今の若い人は存外淡泊で、昔のような感激性の詩趣を倫理的に発揮することはできないかもしれないが、だいたい吹き抜ける空筒からづつでなんでも隠さないところが宣い。これは自分を取り繕つくろいたくないという結構な精神の働いている場合もありましょうし、また隠さない明あけツ放ばなしの内臓を見せても世間でべつだん鼻を抓つまんで苦い顔をするものがないからでもありません。ところが、私のところへ時々若い人などが初めて訪問に来て、後から手紙などにその時の感

想を有ありの儘まに書いて送ってくれる場合などでさえ思いも  
 よらぬ告白をすることがあるから面白いです。と行って  
 たいした弱点を見てくれといわんばかりに書くわけでも  
 ないが、とにかくこつちから頼みはしないので、先方か  
 らかってに寄こすくらいのすいきようてき酔興すいきようてき的な閑文字すなわち一  
 種の意味における芸術品なのだから、もし我々の若い時  
 分の気持で書くとすれば、天下の英雄君と我とのみとま  
 で豪がらないにせよ、習俗的に高雅な觀念を会釈なく文  
 字のうえに羅列して快よい一種の刺戟を自己の倫理性が  
 受けるように詩趣を發揮するのが通例であるが、今例に

引こうとする手紙などにはそんな面影おもかげはまるでない。ま  
 ず門を入はいったら胸騒むなさわぎがしたとか、格子こうしを開ける時にベ  
 ルが鳴ってますく驚いたとか、頼むと案内を乞こうてお  
 きながら取次くつぬぎに出てきた下女るすが不在だといつてくれれば  
 宣のたまったと沓脱くつぬぎの前で感じたとか、それがお宅ですとい  
 う一言で急に帰りたいたい心持に变化したとか、ところへこ  
 ちらへ上れとまた取次くつぬぎに出てこられてますますく恐縮した  
 とか、すべてそういう弱い神経作用がいさゝかの飾り気  
 もなく出ている。徳義的批判を含んだ言葉でいえば臆病おくびょう  
 とか度胸がないとかいいうべき弱点を自由に白状してい



る。高が夏目漱石のところへ来るのにこうビク／＼する  
必要はあるまいとお思いかもしれませんが実際あるので  
す。しかし私はこれが今の青年だからあるのだと信じま  
す。旧幕時代の文学のどこをどう尋ねてもこんな意味の  
訪問感想録は決して見当るみあたまいと信じます。この春でし  
たがある所に音楽会がありました。その時に私の知った  
人が演奏台に立って歌をうたいました。私は招待しょうだいを受  
けていちばん前の列の真中まんなかにいて聴いていました。とこ  
ろがその歌は下手へたでした。私は音楽を聞く耳もなにも持  
たない素人しろうとではあるがその人のうたい振ぶりはすこぶる不味まず

いように感じました。あとでその人に会って感じたとお  
り不味いといいました。ところがその音楽家はあの演奏  
台に立った時、自分の足がブル／＼ふる顫えるのに気が着い  
たかと私に聞きます。私は気が着かなかったけれども当  
人自身は足が顫えたと自白する。昔ならたとい足が顫え  
ても顫えないといい張ったでしょう。なんとかまけおし負惜みで  
もいいたいくらいのところへもってきて、人の気が付き  
もしないのに自分の口から足がガク／＼したと自白す  
る。それだけ今の人が淡泊になったのじやないでしょう  
か。またこれほど淡泊になれるだけ世間の批判が寛大に

なつたのじやないでしようか。人間にそのくらいな弱点は有勝ありがちのことだとテンから認めているのじやないでしようか。私は昔と今と比べてどつちが善よいとか悪いとかいうつもりではない、ただこれだけの区別があると申したいのであります。また過去四十何年間の道德の傾向は明かにこういう方向に流れつゝあるという事実をお認めにならんことを希望するのであります。

古今道德の区別はこれで切上きりあげておいて話は突然文芸のほうへ移ります。もつとも文芸のほうの話とくを詳しくいうつもりではないから、必要な説明だけに留とどめて、ごく

ざつとしたところを申しますが、近年文芸のほうで浪漫ロマン主義しゅぎおよび自然主義すなわちロマンチズムとナチュラリズムという二つの言葉が広く行われてまいりました。そうしてこの二つの言葉は文芸界専有の術語でその他の方面にはまったく融通の利かないものであるかのごとく取扱とりあつかわれております。ところが私はこれからこの二つの言葉の意味性質をきわめて簡略に述べて、そうしてそれを前申ぜんもうしあげ上げた昔と今の道徳に結びつけて両方を総合してごらんに入れようと思うのです。つまり浪漫主義も自然主義も文芸家専有の言語ではないという意味が分れ

ばその結果自然の勢いでこれ等がまた前説明した二種の  
道徳と関係してくるといっているのであります。

この浪漫主義自然主義の文学についてちよつと申上げ  
るまえにあらかじめ諸君の御注意を煩わしておきたいこ  
とがあります。前ぜんもお断り申したごとく今日のお話は  
すべて道徳と文芸との交渉関係でありますから、二種類  
の文学のうち（ことに浪漫主義の文学のうち）道徳の分  
子の交まじってこないものは頭から取除とりのけて考えていたゞき  
たい。それからよし道徳の分子が交まじっていても倫理的観  
念がなんらの挑撥ちようはつを受けない——いな受け得うべからざ

る底ていの文学もまた取り除けて考えていただきたい。それ等を除いたうえでこの二種類の文学を見渡してみると浪漫主義の文学にあつてはそのなかに出てくる人物の行為心術が我々より偉大であるとか、公明であるとか、あるいは感激性に富んでいるとかの点において、読者が倫理的に向上遷善の刺激を受けるのがその特色になつています。この影響は昔流行はやつた勸善懲悪という言葉と関係はありますが、決して同じではない。ずっと高尚こうしようの意味でいうのですから誤解のないように願います。また自然主義の文学では人間をそう伝説的の英雄の末孫かなにか

であるように勿体もったいをつけて有難ありがたそうには書かない。したがって読者も作者も倫理上の感激には乏しい。ことによると人間の弱点だけを綴りつづ合せたあわように見える作物もできるのみならず往往その弱点がわざとらしく誇張される傾きさえあるが、つまりは普通の人間をたゞ有ありの儘まの姿に描くのであるから、道德に関する方面の行為も疵瑕しか交出するといふことは免まぬかれない。ただこういう浅間あさましうなずいところのあるのも人間本来の真相だと自分でも首肯うなずきひと他ひとにも合点がてんさせるのを特色としている。この二つの文学を詳しく説明すればそれだけでだいたい時間が経たちますか

ら、まあ誰も知っているくらいの説明で御免を蒙かうむって、この二つの文学がまえの二傾向の道德をその作物中に反射しているということにさえ気がつけば、こゝにはじめて文芸と道德とがいずれの点において関係があるかということも明かになってこようと思います。

かえすぐく申すようですが題がすでに文芸と道德でありますから、道德の関係しない文芸のことは全然論外に置いて考えないと誤解を招き易やすいのであります。道德に関係のない文芸のお話をすればいくらかでもありますが、たとえば今私がこゝへ立ってむずかしい顔をして諸君を



眼下に見てなにか話をしていゝる最中になにかの拍子で、卑陋ひろうなお話ではあるが、大きな放屁ほうひをするとする。そうすると諸君は笑うだろうか、怒おこるだろうか。そこが問題なのである。というといかにも人を馬鹿ばかにしたような申し分であるが、私は諸君が笑うか怒るかでこの事件を二様に解釈できると思う。まず私の考かんがえでは相手が諸君のごとき日本人なら笑うだろうと思う。もつとも實際遣つてみなければ分らない話だからどつちでも構わんようなものだけれども、どうも諸君なら笑いそうである。これに反して相手が西洋人だと怒りそうである。どうしてこ

ういう結果の相違を来すかきたというのと、それは同じ行為に  
対する見方が違うからだといわなければならぬ。すな  
わち西洋人が相手の場合には私の卑陋の振舞ふるまいをいちずに  
徳義的に解釈して不徳義——なにも不徳義というほどの  
こともないでしょうが、とにかく礼を失しているを見て、  
その方面から怒るかもしれません。ところが日本人だと  
存外単純に見做みなして、徳義的の批判を下すまえにまず滑こっ  
稽けいを感じて噴ふき出すだろうと思うのです。私の鹿爪しかづめらし  
い態度と堂々たる演題とに心を傾けて、ある程度まで厳  
粛の気分を未来に延長しようという予期のあるやさき

へ、突然人前では憚<sup>はばか</sup>るべき音を立てられたのでその矛盾の刺激に堪<sup>た</sup>えなからです。この笑う刹那<sup>せつな</sup>には倫理上の観念は毫も頭を擡<sup>もた</sup>げる余地を見出<sup>みいだ</sup>し得ないわけですから、たとい道德的批判を下すべき分子が混入してくる事件についても、これを徳義的に解釈しないで、徳義とはまるで関係のない滑稽とのみ見ることもできるものだという例証になります。けれどももし倫理的の分子が倫理的に人を刺激するようにまたそれを無関係の他の方面にそらすことができぬように作物中に入<sup>いりこ</sup>込んできたならば、道德と文芸というものは、決して切り離すことので

きないものであります。両者は元来別物であつておの／＼独立したものであるというような説もある意味からいえば真理ではあるが、近来の日本の文士のごとく根底のある自信も思慮もなしに道徳は文芸に不必要であるかのごとく主張するのはなはだ世人を迷わせる盲者の盲論といわなければならぬ。文芸の目的が徳義心を鼓吹するのを根本義にしていないことは論理上しかるべき見解ではあるが、徳義的の批判を許すべき事件が経となり緯となりて作物中に織り込まれるならば、またその事件が徳義的平面において吾人に善悪邪正の刺激を与え

るならば、どうして両者をもって没交渉とすることができよう。

道德と文芸の関係はだいたいにおいてかくのごときものであるが、なおまえに挙げた浪漫自然二主義についてこれ等がどういふふうに通徳と交渉しているかをもう少し明瞭に調べてみる必要があると思います。すなわちこの二種の文学についてどこが道德的でどこが芸術的であるかを分解比較して一々点検するのであります。こうすれば文芸と道德の関係がいつそう明瞭になるのみならず、また浪漫自然二文学の関係もまた一段とはっきりす

るだろうと思ひます。第一、浪漫派の内容からいふと、前ぜん
  
 申したとおり忠臣が出てきたり、孝子が出てきたり、貞
   
 女が出てきたり、その他いろいろの人物が出てきて、す
   
 べて読者の徳性を刺激してその刺激によつて事を為なす、
   
 すなわち読者を動かそうという方法を講じますから、そ
   
 の刺激を与える点はとりも直さず道義的であると同時に
   
 芸術的に違ちがひない（文学というものが感情性のものであ
   
 つて、吾人の感情を挑撥喚起するのがその根本義とすれ
   
 ば）。かく浪漫派は内容のうえからいつて芸術的である
   
 けれども、その内容の取とり扱あつか方かたに至るとあるいは非芸術

的かもしれませぬ。という意味はどうもその書き方によくない目的があるらしい。こういう事件をこう写してこう感動させてやろうとかこう鼓舞してやろうとか、述作そのものに興味があるよりも、あらかじめ胸に一物があるって、それを土台に人を乗せようとしたがる。どうもやゝともするとそこに厭味いやみが出てくる。私が今晚こうやって演説をするにしても、私の一字一句に私というものが付きまつわっておってどうかして笑わせてやろう、どうかして泣かせてやろうと擦くすぐったり辛子からしを嘗なめさせるような故意の痕跡こんせきが見え透いたらさだめしお聴き辛づらいこと

で、ために芸術品として見たる私の講演は大いに価値を損ずるごとく、いかに内容が良くても、言い方、取扱ひ方、書き方が、読者を釣<sup>つ</sup>ってやろうとか、挑撥してやろうとかすべて故意の趣があれば、その故意<sup>わざ</sup>とらしいところ不自然なところはすなわち芸術としての品位<sup>かゝわ</sup>に関するてくるのです。こういう欠点を芸術上には厭味といつて非難するのです。これに反して自然主義からいえば道義の念に訴えて芸術上の成功を収めるのが本領でないから、作中にはずいぶん汚<sup>きた</sup>ないことも出てくる、鼻持<sup>はなもち</sup>のならないことも書いてある。けれどもそれが道心を沈滞せ



しめて向下墮落の傾向を助長する結果を生ずるならばそれは作家か読者かどっちかが悪いので、不善挑撥もまた決してこの種の文学の主意でないことは論理的に証明できるのである。したがって善悪両面ともに感激性の素因に乏しいという点から見て、そこが芸術的でないと難を打つことはできる。その代りその書振かきぶりや事件の取扱方にいたっては本来がたゞ有の儘の姿を淡泊に写すのであるから厭味に陥ることは少ない。厭味とか厭味でないとかいうことはまえにも芸術上の批判であるとお断りしておきました。これが同時に徳義上の批判にもなるから

して自然主義の文芸は内容のいかんにかゝわらずやはり  
道徳と密接な縁を引いているのであります。というのは  
たゞ有の儘を銜てらわないで真率しんそつに書くというのが厭味のな  
い描写としての好所であるのであるが、その有の儘を銜  
わないで真率に書くところを芸術的に見ないで道義的に  
批判したらやはり正直という言葉を同じ事象に対して用  
いられるのだからして、芸術と道徳も非常に接続してい  
ることが分りました。のみならず芸術的に厭味いやみがなく  
道徳的に正直であるということがこの際同じ物を指さして  
いるばかりではなく理知の方面から見れば真という資格

に相当するのだから、つまりは一つの物を人間の三大活力から分察したと異なるところはないのであります。三位一体と申しても可いでしょう。

こう分解して見ると、一見道義的で貫ぬつらいている浪漫ロマン派はの作物に存外不徳義の分子が発見されたり、またちよつと考えると徳義の方面になんらの注意を払わない自然派の流ながれを汲くんだものに妙に倫理上の佳所があつたり、そうしてその道義的であるやいなやが一にその芸術的であるやいなやで決せられるのだから、二者の関係はいつそう明瞭になつてきたわけであります。また浪漫・自然

と名づけられる二種の文芸上の作物中にこの道德の分子がいかにかに織り込まれるかもたいてい説明し得たつもりであります。

なお余論として以上二種の文芸の特性についてちよつと比較してみますと、浪漫派は人の気を引立ひきたてるような感激性の分子に富んでいるには違ちがないが、どうも現世現在を飛び離はなれているの憾うらみを免まぬかれない。みだりに理想界の出来事できごとを点綴てんてつしたような傾かたむきがあるかも知れない。よしその理想が実現できるにしてもこれを未来に待たなければならぬわけであるから、書いてあること自身は

道義心の飽満悦樂を買うに十分であるとするも、その実  
おのれ己には切実の感を与え悪いにくものである。これに反して  
自然主義の文芸には、いかに倫理上の弱点が書いてあつ  
ても、その弱点はすなわち作者読者共通の弱点である場  
合が多いので、必ひっきょう竟ひつぎょうずるに自分を離れたものでないとい  
う意味から、汚きたないことでもなんでも切実に感ずるの  
は吾人の親しく経験するところであります。今一つ注意  
すべきことは、普通一般の人間は平生なにも事のない時  
に、たいてい浪漫派でありながら、いざとなると十人が  
十人まで皆自然主義に變ずるといふ事実であります。と

いう意味は傍観者であるあいだは、他に対する道義上の要求がずいぶんと高いものなので、ちよつとした紛紜ぶんうんでも過失でも局外から評する場合にはたいへん苛からい。すなわち己おれが彼の地位にいたらこんな失体は演じまいといふ己を高く見積る浪漫的な考がどこかに潜んでいるのであります。さて自分がその局に当ってやってみると、かえって自分の見縊みくびった先任者よりも烈はげしい過失を犯しかねないのだから、その時その場合に臨むと本来の弱点だらけの自己が遠慮なく露出されて、自然主義でどこまでも押してゆかなければ遣り切れないのであります。だから

私は実行者は自然派で批評家は浪漫派だと申したいくらいに考えています。次にお話したいのは先年来自然主義をある一部の人が唱えだして以後世間一般ではひどくこれを嫌きらって、はては自然主義といえは墮落とか猥褻わいせつとかいうものの代名詞のようになってしまいました。しかしなにもそう恐れたり嫌ったりする必要は毫もないので、その結果の健全なほうも少しは見なければなりません。元来自分と同じような弱点が作物のなかに書いてあって、己と同じような人物がそこに現われているとすれば、その弱点を有する人間に対する同情の念はしぜん起るべ

きはずであります。また自分もいつころいう過失を犯さぬともかぎらぬという寂寞せきぼくの感も同時にこれに伴うでしょう。己惚うぬぼれの面を剥はぎ取って真直まっすぐな腰を低くするのはむしろそういう文学の影響といわなければなりません。もし自然派の作物でありながらこういう健全な目的を達することができなければ、それこそ作物自身が悪いのであるといわなければならぬ。悪いという意味は作物がでそこなき損ぜんっているのです、どこか欠点があるということです。前説明ぜんした言葉を用いて評すれば、そういう作物にはどこか不道德の分子がある、すなわちどこか非芸術のどこ



ろがある、すなわちどこか偽りを書いているのだということに帰着するのです。有の儘のほんとうを有の儘に書く正直という美德があればそれがしぜんと芸術的になり、その芸術的の筆がまたしぜん善い感化を人に与えるのは前段の分解的記述によってもう御会得になったことと思います。自然主義に道義の分子があるということはいあまり人の口にしないところですからわざわざ長々と弁じました。もっともたゞ新らしい私の考だから御吹聴をされるといふ次第ではありません。御承知のとおり演題が「文芸と道徳」というのですから特にこの点に注意を払

う必要があつたのです。

これで浪漫主義の文学と自然主義の文学とが等しく道徳に關係があつて、そうしてこの二種の文学が、冒頭に述べた明治以前の道徳と明治以後の道徳とをちやんと反射していることが明瞭になりましたから、我々はこの二つの舶来語を文学から切り離して、たゞちに道徳の形容詞として用い、浪漫的道徳および自然主義的道徳という言葉を使って差支ないでしょう。

そこで私は明治以前の道徳をロマンチックの道徳と呼び明治以後の道徳をナチュラリスチックの道徳と名づけ

ますが、さて吾々が眼前にこの二大区別を控えてひか向後わが邦くにの道徳はどんな傾向を帯びて発展するだろうかの問題に移るならば私は下しものごとくあえていいたい。「ロマンチックの道徳はだいたいにおいて過ぎ去ったものである」「貴方がたがなぜかと詰問なさるならば人間の知識がそれだけ進んだからとたゞ一言答えるだけである。人間の知識がそれだけ進んだ。進んだに違ない。元は真まことしやかに見えたものが、今はどう考えても真とは見えない。嘘としか思われなからである。したがって実在の権威を失ってしまうからである。単に実在の権威を失うのみ

ならず、実行の権利すら失ってしまうのである。人間の知識が発達すれば昔のようにロマンチックな道徳を人に強いても、人は誰も躬行きゆうこうするものではない。できない相談だということがよく分ってくるからである。これだけでもロマンチックの道徳はすでに廃すたれたといわなければならぬ。そのうえ今日のように世の中が複雑になつて、教育を受ける者が皆第一に自治の手段を目的とするならば、天下国家はあまり遠過ぎて直接に我々の眸ひとみには映りにくくなる。豆腐屋が豆を潰つぶしたり、呉服屋が尺を度はかつたりする意味で我々も職業に従事する。上下こぞ拳つ

て奔走に衣食するようになれば経世利民仁義慈悲の念はしだいに自家活計の工夫と両立しがたくなる。よしその局に当る人があつても単に職業として義務心から公共のために画策遂行するにすぎなくなる。のみならず日露戦争も無事に済んで日本も当分はまず安泰の地位に置かれるような結果として、天下国家を憂としないでも、その暇に自分の嗜欲を満足する計をめぐらしても差支ない時代になっている。それやこれやの影響から吾々は日に月に個人主義の立場からして世の中を見渡すようになってくる。したがって吾々の道德もしぜん個人を本位として

組み立てられるようになっていゝる。すなわち自我からして道徳律を割り出そうと試みるようになっていゝる。これが現代日本の大勢だとすればロマンチックの道徳換言すればわが利益のすべてを犠牲に供して他のために行動せねば不徳義であると主張するようなアルトリスチック一方の見解はどうしても空疎になつてこなければならぬ。昔の道徳すなわち忠とか孝とか貞とかいゝう字を吟味してみると、当時の社会制度にあつて絶対の権利を有しておつた片方にのみ非常に都合の好いよゝうな義務の負担にすぎないのであります。親の勢いきおいが非常に強いとどう

しても孝を強いられる。強いられるとは常人として無理をせず自己本来の情愛だけでは堪えられない過重の分量を要求されるという意味であります。ひとり孝ばかりではない、忠でも貞でもまた同様の観があります。なにしろ人間一生のうちで数えるほどしかない僅少の場合に道義の情火がパツと燃烧した刹那を捉えて、その熱烈純厚の氣象を前後に長く引き延ばして、二六時中すべてのごとくせよと命ずるのは事実上有り得べからざること。をむりに注文するのだから、冷静な科学的觀察が進んでその偽りに気が付くと同時に、権威ある道德律として存

在できなくなるのは已むを得ないうえに、社会組織が  
漸々変化して余儀なく個人主義が発展の歩武を進めてく  
るならばなおさら打撃を蒙こうむるのは明かであります。

こういふとなんだか現在に甘んずる成行主義なりゆきのよう  
にお取りになるかもしれないが、そう誤解されては遺憾な  
ので、私は近時のある人のように理想は要いらないとか理  
想は役に立たないとか主張する考は毛頭ないのです。私  
はどんな社会でも理想なしに生存する社会は想像し得ら  
れないとまで信じているのです。現に我々は毎日ある理  
想、その理想は低くもあり小さくもありましよう、がとに



かくある理想を頭の中に描き出して、そうしてそれを明日実現しようとして努力しつゝまた実現しつゝ生きてゆくのだと評しても差支ないのです。人間の歴史は今日の不足を次日物足りるように改造し次日の不平をまたその翌日柔らげて、今日までつゞいてきたのだから、一方からいえば正しくこれ理想発現の経路にすぎないのであります。いやしくも理想を排斥しては自己の生活を否定するのと同様の矛盾に陥りますから、私は決してそういう方面の論者として諸君に誤解されたくない。たゞ私の御注意申し上げたいのは輓近ばんきん科学上の発見と、科学の進歩に

伴って起る周密公平の観察のために道德界における吾々の理想が昔に比べると低くなつた、あるいは狭くなつたというだけにすぎない。だから昔のような理想の持ち方立て方も結構であるかもしれぬが、また我々も昔のようなロマンチストでありたいが、周囲の社会組織と内部の科学的精神にもまた相当の権利を持たせなければ順応調節の生活ができにくくなるので、しぜんナチュラリスチックの傾向を帯びるべく余儀なくされるのである。けれども自然主義の道德というものは、人間の自由を重んじすぎて好きなきな真似をさせるといふ虞おそれがある。本来が

自己本位であるから、個人の行動が放縦ふき不羈きになればなるほど、個人としては自由の悦樂あじわを味あじわい得うる満足みはがあると同時に、社会の一人としてはいつも不安の眼を睜みはつて他を眺めなければならなくなる、ある時は恐ろしくなる。その結果一部分的の反動としては、浪漫的の道德がこれから起らなければならぬのであります。現に今小さい波動として、それが起りつゝあるかもしれませぬ。けれども要するに小波瀾しょうはらんの曲折を描く一部分にすぎないのでだいたいの傾向からいえばどうしても自然主義の道德がまだく展開してゆくように思われます。以上を総

括して今後の日本人にはどういう資格が最も望ましいかと判じてみると、実現のできる程度の理想を懐いだいて、こゝに未来の隣人同胞との調和を求め、また従来の弱点を寛容する同情心を持して現在の個人に対する接触面の融合剤とするような心掛こころがけ——これがたいせつだろうと思われるのです。

今日の有様では道德と文芸というものは、たいへん離れているように考えている人が多数で、道德を論ずるものは文芸を談ずるを屑いぢぎよしとせず、また文芸に従事するものは道德以外の別天地に起臥きがしているように独り極ひとめ

で悟っているごとく見受けませんが、けだし両方とも嘘である。その嘘である理由は今までやってきた分解で御合点がいったはずであります。もつとも社会というものはいつでも一元では満足しない。物は極きわまれば通ずとかいう諺ことわざのとおり、浪漫主義の道德が行き詰づまれば自然主義の道德がだんく頭を擡もたげ、また自然主義の道德の弊が顕著になつて人心がようやく厭いや気に襲いわれるとまた浪漫主義の道德が反動として起るのは当然の理であります。歴史は過去を繰返くりかえすというのはこのことにはほかならんです。が、厳密な意味でいうと、学理的に考えてもまた

実際に徴してみても、一遍いっぺん過ぎ去ったものは決して繰返されないので。繰返されるように見えるのは素人だからである。だから今もし小波瀾としてこの自然主義の道徳に反抗して起るものがあるならば、それは浪漫派に違いないが、維新前の浪漫派が再び勃興することはとうてい困難である、また駄目である。同じ浪漫派にしても我々現在生活の陥欠を補う新らしい意義を帯びた一種の浪漫的道德でなければなりません。

道德における向後の大勢および局部の波瀾として目前に起るべき小反動は要するにかくのごとき性質のもので

あつて、道徳と文芸との密接なる関係もまた上説のごとしとすれば、これからわが社会の要する文芸というものもまた同じ方向に同じ意味において発展しなければならぬのも、また多言を要せずして明かな話であります。もし活社会の要する道徳に反対した文芸が存在するならば……存在するならばではない、そんなものは死文芸としてよりほかに存在はできないものである、枯れてしまわなければならぬのである。人工的にいくら声を囁<sup>か</sup>らして天下に呼号してもほとんど無益かと考えます。社会が文芸を生むか、または文芸に生まれるかどちらかはし

ばらく措おいて、いやしくも社会の道德と切つても切れな  
い縁で結びつけられている以上、倫理面に活動する底ていの  
文芸は決して吾人内心の欲する道德と乖離かいりして栄えるわ  
けがない。

我々人間としてこの世に存在する以上どう藻搔もがいても  
道德を離れて倫理界の外に超然と生息するわけにはゆか  
ない。道德を離れることができなければ、一見道德とは  
没交渉に見える浪漫主義や自然主義の解釈も一考してみ  
る価値がある。この二つの言葉は文学者の専有物ではな  
くって、貴方がたと切り離し得べからざる道德の形容詞



としてすぐ応用ができるというのが私の意見で、なぜその応用ができるかという訳と、かく応用された言葉の表現する道德が日本の過去現在に興味ある陰影を投げているということと、それからその陰影がどういう具合に未来に放射されるであろうかという予想と——まずこれらが私の演題の主眼な点なのであります。（明治四十四年八月大阪において述）

（明治四四・一一・一〇『朝日講演集』）



日本文学電子図書館

---

文芸と道徳

著 者 夏目漱石

制作者 宮澤一郎

底 本 「漱石全集 第 9 卷」角川書店  
昭和42年10月10日 6版発行

---

日本文学電子図書館